

平成 23 年 7 月 15 日

## 電通総研が震災による人間関係の変化について調査 ～震災をきっかけとした「絆の見直し」～

電通総研ではこの6月、全国20代～60代男女個人1200名対象に「震災をきっかけとした人間関係の変化」について調査を実施しました。東日本大震災は、家族や友人との「絆」意識を顕在化させ、また「震災婚」という言葉にも見られるように結婚を決めるきっかけにもなりました。一方で、震災をきっかけとした離別もみられ、人間関係に大きな影響を与えたことがうかがえます。人間関係の優先順位を見直し、関係性の再構築をはじめた生活者の実態についてご紹介します。

(最後に『婚活』時代の著者でジャーナリストの白河桃子氏の分析コメントが入っています。併せてご参照ください。)

### 調査結果トピックス

#### 震災は「自分にとってほんとうに大切な人はだれなのか？」を問い直すきっかけに。 「人間関係の再構築がはじまっている」

- 震災をきっかけに「これまで以上に大切にしようと思った人間関係」はあるか。  
：総じて女性が高く、80%が「ある」と答えたのに対し、男性は68%という結果。  
なかでも20代での男女差は顕著であった。
  - ① 「大切にしようと思った」相手は、「親」が54%と最多。  
次いで「配偶者」「子ども」「兄弟姉妹」と続き、「家族との絆」を再認識した結果に。
  - ② 独身で「恋人」をあげたのは、女子で23%、男子では19%。  
恋人がいる人の7割以上が、震災をきっかけに「恋人」との絆を深めたと考えられる。
  - ③ 結婚・出産で、大切にしたい人間関係の優先順位に変化がみられる。  
既婚者では、「親」「兄弟姉妹」よりも「配偶者」が上回る結果に。  
また、小学生以下の子どもがいる父親・母親においては「子ども」がもっとも高く、  
とくに母親の9割が「子ども」と答えた。
- 震災をきっかけに「改めて見直したり、距離をとるようになった人間関係」はあるか。  
：全体では男性の22%、女性では16%が「ある」と回答。やや男性に多い結果。
  - ④ 「改めて見直したり、距離をとろうと思った」相手としてあげられたのは、  
「不適切な男女関係」「過去の恋人」「ネットでのバーチャルな友人」「旧友」。

<このリリースに関するお問い合わせ>

(株) 電通 電通総研 ヒューマン・インサイト部 四元、大屋 TEL: 03-6216-8458

## 調査結果の概要

- 震災をきっかけに「これまで以上に大切にしようと思った人間関係」はあるか。  
：総じて女性が高く、80%が「ある」と答えたのに対し、男性は68%という結果。  
なかでも20代での男女差は顕著であった。

- ① 「大切にしようと思った」相手は、「親」が54%と最多。  
次いで「配偶者」「子ども」「兄弟姉妹」と続き、「家族との絆」を再認識した結果に。

震災は、「家族との絆」をより強くしたことが、数値にもあらわれる結果となった。

また、震災後の自粛意識別でみると、自粛意識が高い人では84%が「ある」としているのに対し、自粛意識がない人では57%と、大きな差がみられた。生活行動や意識において震災の影響を大きく感じている人ほど、人間関係に対する意識も大きく変化していることがわかる。

- ② 独身で「恋人」をあげたのは、女子で23%、男子では19%。  
恋人がいる人の7割以上が、震災をきっかけに「恋人」との絆を深めたと考えられる。

独身女子の“恋人がいる率※”が31%、男子は24%であることから推察すると、恋人がいる女子の4人に3人、恋人がいる男子の8割が、震災をきっかけに「恋人」を「これまで以上に大切にしようと思った」という結果であった。

独身者のなかでも、親と同居している人では18%であるのに比べて、ひとり暮らしの人は25%と「恋人」を大切にしたいと思った傾向が強く、震災を機に生活を共にするパートナーを求める気持ちが強まっている様子がうかがえる。

※「電通『独身』意識調査2010」（20～40代の独身男女1996名対象）より

- ③ 結婚・出産で、大切にしたい人間関係の優先順位に変化がみられる。  
既婚者では、「親」「兄弟姉妹」よりも「配偶者」「子ども」が上回る結果に。  
とくに、小学生以下の子どもがいる父親・母親においては「子ども」がもっとも高く、  
母親の9割が「子ども」と答えた。

既婚者では、「配偶者」と答えた女性が63%、男性は59%といずれも高い結果。独身までは、「親」「兄弟姉妹」が高いが、結婚すると「配偶者」「子ども」がそれを上回り、結婚・出産を機に大切にしたい家族の優先順位が変わることがわかる。

なかでも、小学生以下の子どもがいる20代～40代の父親・母親でみると、「子ども」と答えた母親は89%で、2位の「配偶者(=夫)」や「親」の71%と大差があいた。母親にとって「子ども」の存在が別格であることがうかがわれる。

一方、父親で「子ども」と答えたのは67%で、2位の「配偶者(=妻)」は66%と僅差。夫にとっては、妻も子ども「大切にすべき人」として認識されているようだ。

【調査結果ランキング表】

Q この震災がきっかけであなたご自身の人間関係に変化はありましたか。  
「これまで以上に大切に思った人間関係」についてあてはまるものをお知らせください。

	全体					
	計 (n=1200)		男性 (n=589)		女性 (n=611)	
1位	親	53.8%	親	47.5%	親	59.9%
2位	配偶者	47.0%	配偶者	43.3%	兄弟姉妹	52.7%
3位	子ども (同率2位)	47.0%	子ども	41.1%	子ども (同率2位)	52.7%
4位	兄弟姉妹	46.6%	兄弟姉妹	40.2%	配偶者	50.6%
5位	現在付き合いのある友人	32.3%	現在付き合いのある友人	28.2%	現在付き合いのある友人	36.2%
特にない		25.8%		31.9%		20.0%

	独身			
	男性 (n=214)		女性 (n=149)	
1位	親	48.6%	親	60.4%
2位	兄弟姉妹	35.5%	兄弟姉妹	51.7%
3位	現在付き合いのある友人	30.8%	現在付き合いのある友人	40.9%
4位	恋人	19.2%	恋人	22.8%
5位	最近交流が少なくなってきた旧友	15.9%	最近交流が少なくなってきた旧友	22.1%
特にない		38.8%		27.5%

	既婚					
	計			長子が小学生以下 (20~49歳)		
	男性 (n=375)	女性 (n=462)		男性 (n=82)	女性 (n=98)	
1位	配偶者	59.2%	子ども	66.0%	子ども	87.8%
2位	子ども	56.0%	配偶者	63.2%	配偶者	71.4%
3位	親	46.9%	親	59.7%	親	71.4%
4位	兄弟姉妹	42.9%	兄弟姉妹	53.0%	兄弟姉妹	62.2%
5位	現在付き合いのある友人	26.7%	現在付き合いのある友人	34.6%	現在付き合いのある友人	39.8%
特にない		28.0%		17.5%		11.2%

	全体(計)と比較し、10%以上高い項目
	全体(計)と比較し、5-10%未満高い項目
	全体(計)と比較し、10%以上低い項目
	全体(計)と比較し、5-10%未満低い項目

- 震災をきっかけに「改めて見直したり、距離をとるようになった人間関係」はあるか。  
：全体では**男性の22%、女性では16%が「ある」と回答**。やや男性に多い結果。

- ④ 「改めて見直したり、距離をとろうと思った」相手としてあげられたのは、  
**「不適切な男女関係」「過去の恋人」「ネットでのバーチャルな友人」「旧友」**。

「大切にしようと思った人間関係」は女性のほうが多かったのに対し、「距離をとろうと思った人間関係」は**やや男性のほうが多く**、ほんとうに必要なものを守る女性、ほんとうに必要なもの以外は削ぎ落す男性、という構図が垣間見られる結果となった。

震災を機に多くの人が人との「絆」をより深める傾向が強いなか、一方で、改めて関係性を見直したり、距離をとるようになった人間関係も出てきている。その相手として「**不適切な男女関係**」を挙げた人が**7.3%**、次いで「**過去に付き合っていた恋人**」そして「**直接ではなくネット（SNSなど）でやり取りのある友人**」が**6.8%**、「**最近交流が少なくなってきている旧友**」が**6.7%**という結果であった。

また、震災後の自粛意識別でみると、**自粛意識が高い人では24%が「ある」としているのに対し、自粛意識がない人では10%**。「大切にしようと思った人間関係」も「距離をとるようになった人間関係」も、自粛意識の高い人ほどその変化が大きいという結果であった。

---

#### 【調査の概要】

調査対象：全国、20～69歳、男女個人（学生除く）、1200名

調査時期：平成23年6月4日（土）～6月5日（日）

調査手法：電通リサーチ登録パネル（回答者）を用いたインターネット調査

---

#### 【白河氏分析コメント】

東日本大震災から4カ月。被災地では、未だ復旧も復興も、めどがたっていない。そして、被災しなかった地域に住む人の心も、人間関係も、大地とおなじように大きく揺さぶられたのだ。3・11のあの日、誰に一番に連絡をとりたかったか、誰が一番に自分を気遣ってくれたか。優先順位はおのずと明らかになる。

震災がきっかけで彼との同棲がスタートした震災同棲。元カレからの「大丈夫？」というメールでの震災復縁。3月13日から付き合いだした新規カップルもいた。「夫が結婚以来一番頼りになる」とツイッターに書き込んだ人もいた。

震災婚は4月5月の婚約、結婚指輪の売れ行きや披露宴会場の予約などのデータでも、増えていることがわかる。ずっと「永過ぎた春を終わらせるのは女性の努力か天災しかない」と言ってきたが、まさにその通りのことが起こってしまったのだ。なぜ結婚が増えるのかといえば、今まで結婚を先延ばししていたカップルが動いたためだ。続くと思っていた安心や安定のベースが、自然災害だけでなく、原発事故やそれに続く政府や日本というシステムそのものへの信頼感への失墜、経済の揺らぎ等、さまざまな要因で崩れてしまった。明日が昨日、今日の続きではないとわかった以上、先延ばしする必要がなくなったのだ。

すべてが一瞬にして流されてしまった被災地の映像を見て、「身近な人との絆」「日々の当たり前前の幸せ」に感謝し、大切にしようという気持ちが芽生えたという声をたくさん聞く。不況の中でも結婚を決意するのは、「損得婚」ではなく「絆」「分かち合い」という関係性の本質に根ざした「絆婚」への意識変化が進んでいるからだと思う。

「一人の自分を実感した」と婚活に乗り出す人もいる。一人暮らしの女性が多い、エキサイト恋愛結婚（婚活サイト）では、入会者数が3月の連休明けから急増。3月初旬に比べ4月初旬は男性は0.3%増、女性は10.9%増だった。

全体的に女性のほうが敏感に反応しているが、それは女性の心の方が柔らかく、「怖い」ことを怖いと、「変わってしまったもの」を変わったのだと素直に受け止めるからではないかと思っている。男性、特に今までの社会から恩恵を受けていた人ほど「3・11以降、世界は変わった」と認めたくない頑なな意識が働いているようだ。

有事が起こると、人の本質や自分の中の優先順位、価値観が明確になる。見ないことにして3・11以前の生活に戻るか、時代の変化を受け入れるか、ポスト3・11の意識の差は、今後さらに明確になっていくだろう。

---

【白河桃子氏プロフィール】

---

### 白河 桃子 Touko Shirakawa

東京都出身。慶應義塾大学文学部卒業。

家族社会学会会員／文教大学生生活科学研究所客員研究員

女性の年代別ライフスタイル、未婚、晩婚、少子化などに関するインタビューなど膨大な取材に対応。

その分析コメントには定評がある。

山田昌弘・中央大学教授とともに「婚活（結婚活動）」を提唱し、共著の『『婚活』時代』（ディスカヴァー21社）が19万部のヒットに。「婚活」は2008年度に続き、2009年度も流行語大賞にノミネートされるほど世の中に影響力を持つワードとなり、今も注目されている。

---